



東京YMCA

2013 11月号

発行所 公益財団法人東京YMCA 発行人 廣田光司
135-0016 東京都江東区東陽2-2-20 電話 03-3615-5562

URL <http://tokyo.ymca.or.jp>

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体的全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

変えるべきを 変えていく

世界YMCA/YWCA合同祈禱週

2013年テーマ **"Be the Change"**

神の求める「変革」となる

毎年11月に1週間、世界中のYMCAとYWCAは、聖書のメッセージを聴き、一斉に祈りの時をしています。

今年のテーマは「神の求める『変革』となる（Be the Change）」。

平和と正義と思いやりに満ちた世界を築くために、一人ひとりが変わることが求められています。両団体の会長は、「世界中のYMCA、YWCAは、その組織的な力を発揮して、より良い世界を造り出す責任がある」とし、また「変革は私から あなたから始まります。個人の変革が集団の変革になるのです」と呼びかけています。

「あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。」（新約聖書『ローマの信徒への手紙』12章2節）

各日のメッセージ（概要）は以下のとおりです。

- 【1日目】 私たちは神から召された存在です
質素で分かち合いに基づく生活様式へと変わり、平和で持続可能な世界を造りだせるように。
- 【2日目】 神は「私」に求めています
個人の変革なくして集団の変化はありません。
- 【3日目】 あなたがいるから私がいる
私たちは独立して存在してはいません。地球市民として、隣人を愛することが求められています。
- 【4日目】 私こそが変革
私たちが苦難や貧困、苦痛や排除の問題に無関心でいることのないように。
- 【5日目】 性による不平等に取り組みます
私たちは固定観念を捨てて、行動を呼びかけます。
- 【6日目】 変革の道具として
YMCAとYWCAは神の道具として働きます。

※ ワイズメンズクラブとは

YMCAを支え、地域社会に奉仕する国際団体で、世界約70カ国でおよそ3万人の会員が活動しています。日本では北海道から沖縄まで149のクラブがあり、毎月食事を共にしながら卓話を聞く「例会」を行っているほか、各地域のYMCAと共にさまざまなコミュニティ活動を行っています。

都内には14のワイズメンズクラブがあり、東京YMCAが行うバザーや歌の広場など各種の地域活動や、石巻での震災支援活動など、多くの活動を支援しています。また、「ユースボランティアリーダーズフォーラム」など、若者を育成するための研修も行っています。

＜ご入会・お問合せ＞

ワイズメンズクラブ国際協会東日本区事務所
電話／ファクス：03-5367-6652
yseast2010@gmail.com

11月、江東区では新年度の保育園児募集が始まりました。YMCAオリーブ保育園でも春から希望者の入学を受け入れています。今年9月10日は全日が埋まりました。今年には特に、出産前の見学者が多く、待機児童の厳しさが伺えます。オリーブではここ数年、育児休業をとる職員が増え、復職してくるお母さん保育士が多くなっています。妊娠中は、子どもたちにお腹の赤ちゃんのことを話したり、復職後は保護者と、働く母の気持ちに分かち合えるという強みになっていきます。9月27日の朝日新聞に「男女平等日本なぜ低迷」という見出しで「働く女性の六割出産を機に退職」という記事がありました。中でも3歳未満の子のいる女性の就業率は3割に満たない、というもので家事や育児の負担が重いという内容でした。オリーブ保育園のお父さんたちは、送り迎えや、行事参加など育児参画されている方が多く見受けられますが、まだまだ男性の勤務時間は長く、お母さんの子育て時間が減っていないのでしょうか。私も、今では成人した2人の子どもを保育園に預け、働いてきました。性別役割分業が世間で問われる中、「仕事でも家でも、フルタイムだね」と同じ境遇の友と嘆いたことを昨日のように思い出します。働くお母さん、大変だけど頑張ってください。応援しています。（オリーブ保育園園長 宇野雪枝）



茅野 みつる さん

伊藤忠商事株式会社執行役員、法務部長。カリフォルニア州弁護士。2005年「ヤング・グローバル・リーダーズ」に選ばれた他、2006年にはニューズウィークの「世界が認めた日本人女性100人」に、2010年にはアジア・リーガル・ビジネスの「アジアの社内弁護士25人」に選ばれた。趣味はクラシックの音楽で、休日にはソロコンサートも開く。夫と2人暮らし。東京YMCA元理事長・茅野徹郎さんの長女。

私は2005年、世界経済フォーラムが主催する「ヤング・グローバル・リーダーズ」に選ばれたことをきっかけに、「日本の女性の社会進出に貢献する」という自分のミッションに気づき、いくつかの行動を始めました。

世界経済フォーラムは、グローバルな課題に取り組むための国際機関で、毎年、各国の男女格差についても調査しています。この「ジェンダー・ギャップ・レポート」は、経済、政治、教育、医療の4つの指標で調べているのですが、日本は135カ国中101位。しかも毎年ほとんど順位が下がっています。教育や医療制度は男女差がほとんどなく、世界でもトップクラスなのですが、経済と政治のラ

ンキングが非常に低い。そのため日本は、人口の半分が活躍していない、効率的でない国だと見られています。

私は社長に連絡し、性別などによらず誰もが力を発揮できる多様な組織作り、いわゆる「ダイバーシティ」に取り組む始めました。

「なぜダイバーシティが必要なのか」とよく聞かれますが、ジェームズ・スロウィツキーさんの書いた「『みんなの意見』は案外正しい」ということを指摘しています。

ダイバーシティは、多様な人の能力を活かし、組織を活性化させるためにも重要なことです。

私はまた、「グローバル・リーダーズ」の仲間たちと、2つの社会貢献活動を始めました。1つは、世界の食糧事情のアンバランスを変えたいと願って始めたプロジェクトで、社員食堂のある企業と手を組み、1食につき、途上国の給食1食分である20円が寄付されます。バーチャルではありますが、1つのテーブルで2人が一緒に食べていることから、「テーブル・フォー・ツ」名づけました。

もう1つは、東日本大震災からのラクな部署に異動するなど、守りに入る人が多いですが、女性もビジョンをもって、できることにどんどん挑戦していくって欲しいと思っています。

また同時に、キャリアアップと一緒に考えてくれる人が必要です。上司でもメンター（助言者）でもいい。女性のキャリアの積み方は、男性とは違うこともありますから、個別に考える必要があります。

グローバル時代に生きる これからの世代へのメッセージ

茅野みつるさん講演

We build strong kids, strong families, strong communities. YMCAは、たくましい子どもたち、家族の強い絆、支えあう地域社会を築きます。

る貧困家庭を訪問するなどしましたが、私にとっても大変貴重な体験になりました。企業もまた、「グローバル市民」として、社会に対して何ができるのかを考え、貢献していくことが当たり前になっています。

「世界経済フォーラム」にはまた、食料問題、水、エネルギーといった世界レベルでの課題を考える委員会がいくつもあります。最近では多くの新興国でおきている「腐敗」も課題になっています。新興国での司法制度は必ずしも「クリーン」ではなく、外国の企業にとってこれは重大な問題です。

グローバル時代に生きる私たちは、世界で起きている問題や、世界の流れに関心をもつことが必要です。その中で、個人としてできること、また企業としてできることを考え、行動をおこしていくことが求められていると思います。（まとめ・広報室）

「世界経済フォーラム」にはまた、食料問題、水、エネルギーといった世界レベルでの課題を考える委員会がいくつもあります。最近では多くの新興国でおきている「腐敗」も課題になっています。新興国での司法制度は必ずしも「クリーン」ではなく、外国の企業にとってこれは重大な問題です。

グローバル時代に生きる私たちは、世界で起きている問題や、世界の流れに関心をもつことが必要です。その中で、個人としてできること、また企業としてできることを考え、行動をおこしていくことが求められていると思います。（まとめ・広報室）

赤三角

世界の流れに関心をもつて

「世界経済フォーラム」にはまた、食料問題、水、エネルギーといった世界レベルでの課題を考える委員会がいくつもあります。最近では多くの新興国でおきている「腐敗」も課題になっています。新興国での司法制度は必ずしも「クリーン」ではなく、外国の企業にとってこれは重大な問題です。

グローバル時代に生きる私たちは、世界で起きている問題や、世界の流れに関心をもつことが必要です。その中で、個人としてできること、また企業としてできることを考え、行動をおこしていくことが求められていると思います。（まとめ・広報室）

「世界経済フォーラム」にはまた、食料問題、水、エネルギーといった世界レベルでの課題を考える委員会がいくつもあります。最近では多くの新興国でおきている「腐敗」も課題になっています。新興国での司法制度は必ずしも「クリーン」ではなく、外国の企業にとってこれは重大な問題です。

グローバル時代に生きる私たちは、世界で起きている問題や、世界の流れに関心をもつことが必要です。その中で、個人としてできること、また企業としてできることを考え、行動をおこしていくことが求められていると思います。（まとめ・広報室）

保育職員7人 石巻で活動

遊び場支援

危機管理学ぶ

東京YMCAの保育園や、命を守ることを実践は、石巻センターが、仮設児童館等で働く職員有志7人、住宅に隣接する公園で定期的に開催している「YMCA石巻センターを訪れ、視し、自分たちのこととして現地の視察とボランティア活動を行った。」

2泊3日で実施したこの震災の爪痕が残る石巻、その専門性を活かして子どもたちと遊んだ。

また、多くの犠牲者を出した日和幼稚園と大川小学校を訪問し、現地の方から当日の状況と現状等を伺い、保育者としての学びの時を持った。



女川町総合運動公園で

参加職員の感想をいくつか紹介する。この活動は、11月と12月にも計画されており、継続的な実施が期待されている。震災の記憶を風化させない取り組みが求められている。

(芝浦アイランド児童・高齢者交流プラザ 鶴清忠)

●参加職員の感想文(抜粋)●

● 女川町で子どもたちと遊ぶ活動をお手伝いしました。家族や知人を亡くしたことが想定される子どもたちですが、今も学校が終わると、十分に遊べないままスクールバスで仮設住宅に送られてくる生活で、何か吐き出せないような思いや気持ちを抱えている背景があります。

私たちができることは、子どもたちの心や身体状況にあわせ、その時を自然に心地よい時間にする。少しでも笑ったり、身体を動かしたりして、その積み重ねで、少しずつ、不安やストレスや色々な思いが軽くなるような関わりを、今後も定期的に継続して行っていくことが大切なのではないかと感じました。

日和幼稚園や大川小学校にも連れていっていただき、現地の方のお話もお聞きました。幼い犠牲者を出した現場を見ながら、さまざまな思いが込み上げてきて、自分でもどのように理解したらいいか分からなくなりました。私も子どもたちの大切な命をお預かりしている者として、適切な判断ができるためにはどうしたらよいかなど、自分なりに考えている状況です。

まだ整理しきれっていませんが、目の前の出会った人、出会うことなど一つ一つを、以前にも増して愛おしく思うようになりました。その小さな一つ一つを大切にしながら、今は日々を送っていきたいと思っています。

(芝浦・こども園/看護師 鷹松美帆)

● 1日目は、19mもの津波が襲った女川町を案内していただきました。丘から見る沿岸部には何もなく、3〜4階建ての建物が横たわっているのみでした。この沿岸部の方々は今山の上の仮設住宅に住んでいますが、その隣にある公園で私たちは子どもたちと触れ合ってきました。私たちには想像もできないような恐怖や悲しみを背負っているはずで

(中略) 私たちができることは、子どもたちに寄り添い、とにかく一緒に楽しんで遊ぶことでした。一番大切なのは、笑顔になってもらいたいという「思い」ではないかと感じました。

2日目は、日和山や大川小学校などに案内していただきました。みんながこの山に避難していれば、と思うと居たたまれない気持ちでいっぱいになりました。日和幼稚園の園児が流されてしまった現場にも案内していただきました。

日和幼稚園も大川小学校も、危機管理ができていなかったと聞きました。確かに震災が起こるまでは巨大津波が来るなんて誰も予想していなかったと思います。私たちは保育に携わる者として子どもたちの命を守るために、予期せぬことも想定し、危機管理の意識を常に持ち続けなければいけないと、深く感じました。

(芝浦・児童高齢者交流プラザ/

児童厚生員 熊本穂実)

歌の力で元気になる

歌の会「すずらん会」10周年



みんなで童謡や唱歌などを歌う「すずらん会」が10周年を迎えた。月に一度、南センターを会場に始められたこの会は、今では東陽町や町田、横浜、埼玉など各地のYMCAで行われるようになったほか、世田谷区ボランティアセンターなどにも広まっている。

◇ ◇ ◇

10月の第4金曜日、南センターを訪問すると、約40人が「サントラルチア」を熱唱していた。皆さん実に気

持ちよさそうだった。参加者は、60歳〜80歳位。遠方から訪れる方もいて、雨にもかかわらず会場は一杯だった。

参加者には歌のリストが配られ、好きな曲をリクエストしていく。会場から「赤とんぼ！」などと声があがると、司会の小川圭一さんがその曲の由来やエピソードを紹介し、会場を盛り上げる。パソコン係りの小原武夫さんが歌詞をスクリーンに映し出し、小川さんの奥様である礼子さんが

ピアノ伴奏をする。高齢者が歌いやすいよう低めのトーンにアレンジし、譜面もなしに歌をリードする。受付係りもお茶菓子の用意もすべて会員が担う。それぞれの手馴れた様子に、10年の思いが伺えた。

この日『心の空にともしびを』をリクエストした女性は、当初からこの会に通う常連の1人。「3.11の震災当日も、余震が続く不安な中、みんなで帰らずに歌い続けた」と話してく

れた。以後この会は、石巻の仮設住宅などを定期的に訪問して歌の会を開催し、被災地を励ましていく。リーダー役の小川圭一さん

は、「悲しみを背負った人が、言葉をかけるのは難しい。けれども一緒に歌い、共に悲しむことはできる。また童謡を歌えば、それを歌っていた頃にタイムスリップできる。歌には力がある」と語る。「今後は、足

が不自由になっても来られるように運転ボランティア付きの歌の会をやりたい」「親子、孫と一緒に歌う機会も作りたい」と夢はつぎ

ない。会の締めくくりにいつも「ふるさと」。その美しい詩に、参加者は心満たされ表情で、和やかに挨拶を交わし、帰路につかれた。(広報室)

現場レポート

■ Y M C A 専門学校生 170 人がボランティア「全国障害者スポーツ大会」

10月10日〜15日、東京YMCA医療福祉専門学校の全1年生106人と、社会体育・保育専門学校生64人が、「全国障害者スポーツ大会」にボランティアとして参加しました。この大会は毎年、国体終了後に行われる全国的な祭典で、選手・役員合わせて約5500人が参加します。

医療福祉専門学校生は、陸上競技の選手団に付き、誘導、お弁当配布、荷物管理、移動助介、応援、交流などを行いました。6日目の見送りの時は、感動的な涙のお別れとなりました。

社会体育・保育専門学校生は、



水泳競技大会を補助役員としてサポートし、選手の介助や誘導補助などを担いました。

障害について、そしてボランティアについて考える良い機会になりました。

■ 佐野和夫氏(日本水泳連盟前会長) 特別講義

社会体育・保育専門学校



佐野和夫先生が10月31日、社会体育専門課程1年生を対象に「世界水泳2013報告・2020年東京オリンピックに向けて」と題し、2時間にわたる特別講義をしてくださいました。

佐野先生は、1995年に日本水泳連盟会長に就任、ロンドンオリンピックの水泳陣の活躍に尽力され、国際水泳連盟(FINA)理事として、2020東京オリンピック招致にも貢献されました。東京YMCA

Aには、中学生の頃より関わられ、ボランティアリーダーとしてキャンプでも活躍されています。

講義では、今年7月の世界水泳選手権大会(競泳)の報告や、2020オリンピック開催地決定に至る活動など、なかなか聞くことのできない貴重なお話しを伺いました。

2020年東京オリンピックの時には現在の1年生は26歳になっています。「明日の指導者は今日つくられる」という東京YMCA100周年の標語のとおり、未来の指導者を目指す在校生への特別講義でした。(社会体育・保育専門学校:中島きよ)

【追悼】

加美山 節さんを偲んで

東京YMCA
元副総主事

齊藤 實

加美山 節さんが93年の生涯を全うされ、東京YMCA会員として歩み続けられて天に帰られた。2013年9月11日であ

った。加美山さんは、戦争直後、神田会館が米軍に接収されていた「富士見町時代」に、20歳代の青年キリスト者会員が選出した「最年少理事」であられた。新しい時代を望む気鋭の会員グループ「ヨハネ会」が推した若者代表として、加美山さんは戦後を歩みだされたのであ

った。東京YMCAでは常議員会議長を2度にわたって務められた。また、財団理事長としての重責を東京YMCAが神田を離れるときまで担われた。日本YMCA同盟では、委員長として日本YMCA総体の安定を支え、海軍主計大尉で復員され

た。戦後は銀行勤務に戻られ、ラジール東京銀行頭取などを歴任された。その間、私が執筆者となった2つの歴史書にはそれぞれ序文をお書きいただいた。『東京キリスト教青年会百年史』には東京YMCA常議員会議長として、『賛育会の七十五年』では社会福祉法人賛育会理事長としてである。08年には、第9回キリスト教功労者顕彰を日本キリスト教文化協会からお受けになった。

1947年春、20歳代キリスト者グループヨハネ会の最年少会員であった私は、お宅を訪ね、お勤めからお帰りになるのを待って、理事候補となることをお引き受けいただいた。それから66年間を、YMCA会員の「仲間」として歩み得た光栄を想う。今こうして偲ぶことばを書く機会も与えられた。この不思議な繋がりに、神さまのご計画の確かさをみて感謝の想いで一杯である。

グラunchャ東雲 ッワニ退治など人気

ゲーム機使い、楽しく介護予防

グラunchャ東雲は、江東区から「ウォーキング」は、江東区長の強い意向を受け、「楽しく遊び感覚で介護予防を目的とした「ワニパニック」と「ドキドキへび退治」の2台のゲーム機を導入している。

「ワニパニック」は、次々出てくるワニをハンマーで叩いて得点を競うゲーム。脳や運動機能の活性化が期待される。



↑ゲーム「ワニパニック」は、次々出てくるワニをハンマーで叩いて得点を競うゲーム。脳や運動機能の活性化が期待される。



↑YMCAオリジナルの脳刺激体操

慣を持っていませんでした。しかし、この講座に参加したことで体を動かす楽しさを感じ、講座修了後に自宅で運動されるようになった方、またはグラunchャ東雲の運動スペースに積極的に足を運んでトレーニングされるようになった。

方も多くいます。今後も、「楽しく遊び感覚で介護予防」をモットーに、江東区の高齢者の介護予防や運動に取り組むきっかけに貢献できるよう、楽しいプログラム運営に努めてまいります。(グラunchャ東雲 松原愛作)

会員有志で ペンキ塗り

山中湖センター90周年に



塗装範囲は非常に広く、作業には延べ8日間かった

9月27日〜29日、快晴に恵まれた山中湖センターに19人の会員が集まった。

28日夜はバーベキュー。ビール片手に口角沫を飛ばし、食べきれないかと思われた食材もいつの間にか片付け、楽しい懇親の時間を過ごした。

作業最終日、鮮やかな色合いに仕上がった出来栄に、多少の刷毛むら、ペンキだれはご容赦いただき、錆び落としなどの下地処理を含め、延べ8日間ほどのワークを終えた。(会員部運営委員長 小原武夫)

*担当職員より
この作業は、古い塗装はがしなど下準備が大変で、皆さん何度もセンターに宿泊して作業されました。また、工具類や塗料もご寄付いただきました。感謝します。(野外教育センター 星野太郎)

会員ソフトボール大会
にほんご学院留学生も

「第30回オール東京YMCA・近隣YMCA会員ソフトボール大会」が10月14日、埼玉県の出版健康保険組合大宮運動場で開催された。

とちぎYMCA、前橋YMCAからも参加があり、16チームがプレイした。専門高校生、ワイズメン、会員、賛助企業、ボランティアリーダーなど、応援やボランティアを合わせて266名が集い、秋空の下、交流を深めた。

東京YMCAにほんご学院からは、この秋に来日したばかりの新入生含め22人が参加。中国、ベトナム、

モンゴルなど、野球やソフトボールに馴染みのない国からきた留学生たちにとっては、人生初の体験となった。担当スタッフの報告をきいた。

なにしるバットを持つのもクラブをはめるのも初めて、という留学生たち。事前にルールを勉強したが、理解に乏しいことは否めません。試合の途中でしばしば作戦会議が行われ、「ボールを打ったら一塁へ走る!」「ボールを取ったら一塁へ投げる!」と、チームメイトのみならず、相手チームの皆さんからもたくさんのアドバイスをいただきました。チームは早々に敗退してしまいました。

が、周囲の試合のファインプレーに声援を送るなど、ソフトボールを楽しんだ一日になりました。(にほんご学院 小野実)

東京ーフ回ストバレーYMCA便り

キャンプ場チャペルでの結婚式

9月に、ここニューヨーク州に落ちてしまうと考える。母親フロストバレーYMCAのスタッフの結婚式が、キャンプ場内のチャペルで行われた。女性同士の結婚だ。フロストバレーYMCAには、カップルや夫婦で働いている人がとても多い。そして、その中には同性のカップルもいる。隣のニュージャージー州でも9月27日、同性婚を認める判決が下ったというニュースが流れてきたばかりだった。

ニュースを見ながら「プレイヤーズ フォーホビー(ホビーのための祈り/Prayers for Bobby)」という実話を元にした映画を思い出した。ホビーは、敬虔なクリスチャンの家庭に生まれ育った青年で同性愛者だ。そのことを知った母親は、このままだと愛する息子が地獄

性愛は個人の問題で収まらず、罪、善悪、そして法を変える社会問題にまで及ぶ。近年、10代の若い同性愛者たちが相次いで自殺したことを受けて「It Gets Better(きっと良くなるから)」というプロジェクトがインターネット上で始まった。オバマ大統領をはじめ多くの著名人が「きっと良くなる」という希望を込めたビデオメッセージを投稿している。

大学の講義の中で最後に教授が言っていたのは「同性愛は、愛」という言葉だ。人を愛することを神様が祝福しないはずはない。結婚式の様子を見ながら、そのようなことを考えさせられた。(在フロストバレーYMCA 池田麻梨子)

知らぬ間に 世が変わらぬよう

すべての人を一つにしてください

「なんで、あんなだけに話すか」というと、これからいろんなことが起こるの自分の目で見つかり見るとき、と言いたいかからや。クリスチャンへの弾圧もきつうなと思う。自分がしっかりしとかなんだら、潰されてしまうよ。この戦争が終わったとき、恥ずかしい人間になったとったらあか返しのつかないものになっている場合があります。12月8日は日本が真珠湾に宣戦布告をした日で、8月6、9、15日とはその水温の上昇を知覚でもに過去に学ぶ日としたい

「少年H」によれば、その時日本は知らぬ間に言いたことがいえない状況になっていたようです。その渦中であって一つ一つは意味が見いだせなくても、あとになってあの時のあの状況がこの事態を引き起こしたのだ、と反省しても取り返しがつかないことであつたら悲劇です。「皆が気付かないうちに憲法が変わっていたあの手法に学べ」という、ある政治家の発言もありました。正確な情報収集と皮膚感覚を持ち、愚かな力エリにならぬよう目を凝らして現状を見極めていきたいものです。(総主事 廣田光司)

協賛企業賞に桑原さん

地球市民フォトコンテスト

日本YMCA同盟が主催する「YMCA地球市民フォトコンテスト」で、東京Y「ぞー」が協賛企業賞を受賞した。

桑原さんは、3月に訪れたバンクラデシユのピリシリYMCAで、初めて数字の読み書きを学ぶ小学生を撮影した。「さあいくぞー」が協賛企業賞を受賞した。

ス全員で元気に読み上げながら練習する子どもたちには、初々しい意気込みがあふれていたという。

バンクラデシユでは、東京YMCA国際協力募金等から支援を受けて、「NFPE」という無償の小学校を運営しており、家事手伝いなど家庭の事情で公立の小学校に通えない子どもたちが学んでいる。



「さあ、いくぞー」(撮影・桑原もえみ)



「第30回オール東京YMCA・近隣YMCA会員ソフトボール大会」が10月14日、埼玉県の出版健康保険組合大宮運動場で開催された。

とちぎYMCA、前橋YMCAからも参加があり、16チームがプレイした。専門高校生、ワイズメン、会員、賛助企業、ボランティアリーダーなど、応援やボランティアを合わせて266名が集い、秋空の下、交流を深めた。

東京YMCAにほんご学院からは、この秋に来日したばかりの新入生含め22人が参加。中国、ベトナム、モンゴルなど、野球やソフトボールに馴染みのない国からきた留学生たちにとっては、人生初の体験となった。担当スタッフの報告をきいた。

なにしるバットを持つのもクラブをはめるのも初めて、という留学生たち。事前にルールを勉強したが、理解に乏しいことは否めません。試合の途中でしばしば作戦会議が行われ、「ボールを打ったら一塁へ走る!」「ボールを取ったら一塁へ投げる!」と、チームメイトのみならず、相手チームの皆さんからもたくさんのアドバイスをいただきました。チームは早々に敗退してしまいました。

が、周囲の試合のファインプレーに声援を送るなど、ソフトボールを楽しんだ一日になりました。(にほんご学院 小野実)